

東日本大震災がもたらした学生への影響

森下 英美子*・中山 智晴**

2011年3月11日に発生した東日本大震災を体験した環境教育研究センターの学生たちは、被災地の子どもたちにランドセルを届ける支援活動を実施した。ふじみ野市内の小学校からは1024個のランドセルが集まり、直接被災地まで届けることができた。

この活動全体の中で、震災直後に感じたこと、ふじみ野市内での“ランドセル回収活動”への参加意識、被災地への“支援物資運搬活動”への参加意識を調査した。その結果、学生の行動は、「積極的な行動」、「消極的な行動」、「積極的な行動回避」、「行動変化なし」の4つのカテゴリーに分かれた。積極的な行動を取らなかった学生の中には、対応後の後悔や積極的な行動を行った学生への共感による意識変化から、次の支援活動の際に積極的に行動する者がいた。

また、一般学生へのランドセル大作戦報告を通じて、報告を聞いた学生と聞かなかった学生の意識の違いを調査した。その結果、報告を聞いた学生のほうが、被災地に行って支援したい割合や、被災地での環境教育の必要性を認める割合が有意に多かった。同年代の学生の取組みを「知る」こと、「共感する」ことが支援活動への参加意識を高める結果となったものと考えられる。

活動の中で人と人との繋がりを求める学生たちが「積極的な行動」を取るためには、社会全体での「支え合い」の心を再確認し、「心の繋がり」や「他者への共感」を育む土壌を作り出していくことが効果的である。

Key Words : 東日本大震災, 支援活動, ボランティア, 共感, 意識変化

* 文京学院大学環境教育研究センター

** 人間学部コミュニケーション社会学科

はじめに

2011年3月11日に発生した東日本大震災は、甚大な被害を受けた東北地方の方々のみならず、遠方で暮らす私たちにも大きな影響をもたらした。私たちは、自然の脅威を目の当たりにし、自然を人間の力で押さえつけることの困難さを痛感させられた。そして、それにより人間の非力さが浮き彫りとなった。同時に、震災直後から被災者への支援活動が実施され、人間関係の希薄さが強調される現代の日本人の中で、不幸な中にもやさしさを感じる場面にも出くわしてきた。

震災後のボランティア活動への参加は、様々なきっかけでなされるものであるが、活動につながる意識、意欲はどのような契機をもって実際の行動へとつながるのであるだろうか。

東日本大震災以前にも、阪神大震災のさいには多数の若者が震災ボランティアとして被災者支援活動に参加していた。若者の参加者には、震災ボランティア活動によくある悲壮感や正義感といった切迫した感じはあまりなく、むしろ、他者と自然に繋がることを求めているようであったとされる。この活動を通じて、自分と社会について感じ、考えようとしている状況は、現在の若者の特質を反映しているのではないかと考えられている。（滝沢 2006）

本報告は、今後起こるであろう震災被害に対する大学生の支援活動の輪を広げていくための方法に役立てる基礎的資料を得る目的で、文京学院大学環境教育研究センター（以下センターとする）に所属する学生が、この震災を機にどのような考えを持ち、どのような行動に出たかを事例と分析により検討、考察を行う。

震災体験からボランティア活動へ

センターに所属する学生たちは、日常では環境教育活動を実践している。震災の当日も10名ほどの学生がセンターで活動の話し合いをしており、大学内で被災した。他にも、都内にいた者、他県にいた者、海外にいた者などがいたが、完全に交通が麻痺したことにより、その日のうちに家に帰ることができないという体験をした者がほとんどであった。その一夜の過ごし方は、大学内で宿泊した者、避難所として開放された都内のホテルで一夜を明かした者、テーマパークで従業員の気配りの中過ごした者、一晩中歩いて帰った者など様々であった。

震災以降、大学には登校停止の状態となり、家で何かできることはないかと悶々としていた学生たちの有志は、震災発生約2週間後の3月29日にセンターに集まり、被災者支援活動を実施するための話し合いの場を持った。いくつかのアイデアが出たが、既に被災地に入り支援活動を行っていた団体から聞いた現場の状況を参考に、卒業式、入学式の時期が近づいているこの時期にあわせ、被災地の小学生に津波で流され失ったランドセルを送る“ランドセル大作戦”活動を実施することとなった。

翌日の3月30日には、大学のある埼玉県ふじみ野市の小学校13校すべてに協力を呼びかけ、

各小学校でランドセルを集める体制を整えてもらった。4月5日には、各小学校を車で回り、合計1024個のランドセルを大学に運び込んだ。集められたランドセルは、大学内に作業スペースを借り、ランドセルの表面をきれいにふき取り、袋に入れ、段ボールに梱包した。この活動には、センターの学生のほとんどが参加した。大学では、学年が始まり、健康診断が行われるため、普段より多くの学生が同じ時間に集まる状況となった。それを利用して、大学入口近くにあるメインホール、アトリウムにて、学内の全学生にランドセルに同梱するメッセージを書いてもらうことを呼びかけた。これにより多くの協力者が得られ、全てのランドセルにメッセージを同梱することができた。



図1 ランドセル収集

左は小学校にて集められたランドセルを車に積み込み大学へと運ぶ様子。右は大学内にて、ランドセルをきれいにしメッセージを添え、箱詰めしている様子。

4月8日、地元活動団体の協力を得て運搬車等を確保し、宮城県仙台市及び気仙沼市に向けて出発した。この運搬車にはランドセル以外にも地域活動団体が集めた支援物資が乗せられ、ランドセルを含めた支援物資の運搬となった。この活動には、他大学、他学科の学生を含めて7名の学生が参加した。

ランドセルは、4月9日、仙台市の倉庫に900個保管してもらった。倉庫では、ランドセル用のスペース確保のため、他のボランティア団体の支援トラックへの荷物の積み込みや、900個のランドセルの積み下ろし及び整理を行った。この900個のランドセルは、4月11日、福島県相馬市の支援団体の手により相馬市の避難所に届けられた。

運搬ボランティア一行はそのまま気仙沼市に移動し、気仙沼市の避難所として使われているホテルに宿泊した。現地では、震災後約1カ月であったが、ライフラインの復旧はまだ不完全であった。電気は、1日2時間発電機を回し、その時間だけ点灯した。水は毎日給水車でホテル前の大きなポリタンクに届けられ、近隣の住人が容器を持って取りに来ていた。ガスはプロパンガスであった。運搬ボランティア一行は、水、燃料、食料、寝具等、生活に必要な物資全部を持ち込み、スペースだけを借りる形でその日を過ごした。

気仙沼市の被災状況はテレビで見た以上に悲惨であり、想像以上に巨大な船や建物が簡単に壊されている現状に、一同は愕然とした。また、津波の被害のあったエリアとまぬがれたエリアの差が歴然としていて、その境目がラインでくっきり区切られていることにも驚いた。



図2 被災地の状況

左はトラックからランドセルや支援物資を運び出す様子。右は気仙沼市にて、船も車も同じように流されて陸地に打ち寄せられている様子。

翌10日午前、運搬ボランティア一行は、避難所に支援物資を届けるグループと、気仙沼市の様子を視察するグループに分かれて活動した。支援物資を届けるグループは3方向に分かれて出発したが、気仙沼を離れるにつれてさらに被害が大きくなっていくことに驚いた。また、孤立状態の避難所もあり、その場で支援物資の箱を開けて被災者の方に必要な物を選んでもらった。市内の視察グループは、市役所の壁一面に貼られた安否の伝言の紙や全国から寄せられた応援メッセージ、自衛隊が設営する簡易風呂などを見学した。

10日午後は、南三陸の被災地を經由して石巻まで支援物資を届けた。南三陸の国道沿いは、海岸まで見渡せるほど何もかもが流されてしまっていた。ぼろぼろになりながらもかろうじて形をとどめているコンビニやコンクリートのプラントなどがちらほら見えるだけで、あとは瓦礫の山と化していた。寸断された道路を避けて未舗装路を含む山道を迂回したところ、通常は1時間もかからない道のりが3時間ほどかかった。

ランドセル大作戦はこの運搬作業で完了となった。その後は、ランドセルが届けられた相馬市から募金活動のために東京に訪れた中高生と一緒に募金活動に参加したり、その中学生の宿泊所にて環境授業を実施したりした。また、相馬市で行われている仮設住宅への炊き出しや、家を失うなどの理由で飼いきれなくなった犬を一時的に保護する施設のボランティアに参加する学生もいた。

支援物資運搬時につながりを持った岩手県大船渡市のボランティア団体への協力で、ガレキ撤去の活動に行く学生もおり、10月現在までに3回の活動が実施され、今後も継続されていく予定である。

2006年からグリーンツーリズムで付き合いのある福島県郡山市逢瀬町には、援農活動や屋根の修理などのボランティアを行った。そして、逢瀬町の野菜を代行販売するボランティアへとつながった。郡山市逢瀬町の野菜は、自治体の計測では放射線量は検出されていないにもかかわらず、売れない状態が続いている。野菜の代行販売は、ふじみ野市上福岡駅前名店商店街と連携したチャレンジショップ、各種イベントなどで、継続的に実施されている。

調査の目的

センターの学生が継続している震災支援ボランティアはいくつかあるが、本報告では、その最初の取りかかりとなったランドセル大作戦を通じ、震災後の学生の意識の動向に着目している。ランドセル大作戦が実施されたころ、被災地で活動する方々から、春休み期間にしては大学生のボランティアが大変少ない、という声をよく耳にした。また、日常、環境教育活動を実践する学生の中にも、“ランドセル大作戦”に積極的に参加する人もいれば、そうでもない人もいた。しかし、震災のことを忘れている学生はほとんどおらず、学生からは、気がかりではあるが何をしたいかわからないという声も聞かれた。

本研究の目的は、支援活動への参加の是非を問うものではなく、支援活動に積極的に参加する学生や消極的な学生の意識を分析し、大学生の被災者支援活動への参加意識を左右する要因を評価することである。

調査方法

調査は以下に示す2種類を実施した。1つ目の調査は、学生が被災者支援活動へ参加するまでの意識変化と要因を把握することを目的に実施し、2つ目は、学生の支援活動の輪を広げていくための方法に役立てる基礎資料を得る目的で実施した。

1. 環境教育活動に参加している学生への調査

日頃環境教育活動に参加している文京学院大学の学生に対し、今回の大震災直後に感じたこと、その後、2週間程経過した後に実施された“ランドセル回収活動”への参加意識、さらには、震災4週間後に実施された被災地での支援活動への参加意識を調査した。

対象は、日頃から環境教育活動に参加している学生メンバー9名である。対象の選定にあたっては、“ランドセル回収活動”に参加した後、被災地へ届けに行った学生、行かなかった学生、ならびに、はじめから積極的関わりを持たなかった学生を抽出した。調査への参加に対しては、事前に目的を説明し了承が得られた上でインタビュー内容を録音した。

インタビュー方法は、半構造化式とし、事前に作成したインタビューガイドに基づき実施し、ICレコーダーにて録音した。録音されたデータは逐語録を作成し、質的手法を用いて分析を行

った。

分析の手順は、研究目的に照らし合わせ、その内容の意味する箇所をチェックし、その後チェックされた内容を要約する名前を付けていった。それらの名前の共通する内容をひとまとまりとし、概念の生成を行った。さらに、概念から共通しまとめられる内容をカテゴリーとした。それらを繰り返し、各概念、カテゴリーの関係をカテゴリー関連図として作成した。概念、カテゴリー生成に当たっては、2名の学生と1名の教員により分析を実施、相互に確認し信頼性を得ることとした。

2. 環境教育活動に参加していない一般学生への調査

日頃環境教育活動に参加していない一般学生に対して、筆者らの環境科目講義の中で、アンケート調査を実施した。一般学生は、講義の中でランドセル大作戦の報告を聞いた学生、講義の中では何も聞かなかった学生の2つのグループに分けられる。ランドセル大作戦報告では、活動の様子を時系列に並べた写真を使って解説した。この報告には、ふじみ野市内でのランドセル収集活動と被災地への運搬状況、被災写真をもとにした被災状況が含まれる。ランドセル大作戦報告と学生へのアンケートを実施したのは2011年4月13日、回答者数は48名であり、ランドセル大作戦報告を実施せずにアンケートだけを行ったのは、2011年4月19日、回答者数は164名であった。

アンケートの内容は、以下の3項目である。

- ① あなたは、被災地に行って、ボランティアをしたいと思いますか？
- ② 被災地の子どもたち（幼児、小学生）に環境教育は必要だと思いますか？必要だと思う人はどんな環境教育がよいと思うかを書いてください。
- ③ 被災地の子どもたち（幼児、小学生）にしてあげたいことを書いてください。

以上のアンケート結果を集計し、ランドセル大作戦の実体験を聞いた場合と聞かない場合の違いを比較した。

結 果

1. 環境教育活動に参加している学生への調査 “インタビューガイドと分析結果”

1-1 インタビューガイド

- ① 東北大震災が発生した直後に感じたことについてお聞かせください。
- ② テレビ等のメディアで被災地の状況を知ったとき、どのようなことを感じ、考えましたか？
- ③ 被災地で支援活動を行いたいと考えましたか？
 - 1) 考えた方は、どのような気持ちでそう思いましたか？
 - 2) 考えなかった方は、どのような気持ちでそう思いましたか？
- ④ 支援に行かれる前後（行かなかった方は、行った人から話を聞いた後）で、私生活への影

響、意識の変化などはありましたか？

1-2 分析結果

分析の結果、表1に示すように、5つのカテゴリー、13のサブカテゴリー、29の概念を得ることができた。5つのカテゴリーとして、「震災の恐怖」「不安の増大」「思考の停止」「その後の対応」そして「対応後の意識変化」が抽出された。

表1 分析結果

カテゴリー	《サブカテゴリー》	<概念>	
震災の恐怖	体感する恐怖	地震の揺れに対する直接的恐怖 地割れ、停電などに対する間接的恐怖	
	想像する恐怖	震源地の被災状況を想像した際の恐怖	
不安の増大	他者から与えられる不安	周囲の人たちの動揺による不安増大	
	自らが与える不安	身内の安否 将来への不安	
思考の停止	精神的パニック	精神的疲労 地震後に発生した津波の恐怖	
	思考回路の遮断	情報不足による思考困難 茫然自失	
その後の対応	積極的な行動	被災地の知り合いの救済 友人の支援に対する考えに共感 周囲の人たちのやさしさ	
		消極的な行動	家にいても仕方がないから 次の機会に支援活動 地元でできる支援を実施
			積極的な行動回避
	行動変化なし	震災による行動変化なし	
	対応後の意識変化	より良い生き方の見直し	支援の在り方の模索 情報の見方に変化 想いを伝える大切さ 今後の生き方の模索
			生きていることの素晴らしさを実感
精神面の不安定			
自分への後悔			行動しなかったことに対する後悔 行動したことに対する後悔

表1を参考に、図3に示す結果図にまとめ、分析結果のストーリーラインを述べる。カテゴリーは[]サブカテゴリーは《 》、概念は< >で示す。

まず、ストーリーを時系列的に「震災直後」,「震災発生2週間後」そして「震災発生4週間

後」の3段階の流れで分析する。この分類は、震災発生直後、ランドセル回収活動、そして、被災地へのランドセル運搬・配布活動終了後に相当している。

震災直後、学生たちは居場所に関係なく**「震災の恐怖」**を感じる。はじめにく地震の揺れに対する直接的恐怖を感じ、その後起きたく地震、停電などに対する間接的恐怖を感じている。これら**「体感する恐怖」**が治まると、次には**「想像する恐怖」**が始まる。これは、震源地の被災状況を想像した際の恐怖のことであり、取りあえず身の危険が回避されたと感じた後に、自分へ向いていた意識が遠く離れた被災地に向き始める。

その後、震災の状況が把握できずにく周囲の人たちの動揺による不安増大、すなわち、**「他者から与えられる不安」**が増大していく。それと連動してく身内の安否が気になり始める。被災の状況が分からないため、今後自分はどうなってしまうのだろうかというく将来への不安が沸き起こり**「自らが与える不安」**で自分が押しつぶされそうになっていく**「不安の増大」**が起きる。

その後、テレビやインターネット、携帯端末などのメディアで被災地の状況が繰り返し流されることにより、終末的状况にく精神的疲労を感じ、続いて起きたく地震後に発生した津波の恐怖により**「精神的パニック」**を起こしていく。また、繰り返し流され続ける悲劇的映像にく茫然自失状態となり、情報不足により今後取るべき行動判断ができにく情報不足による思考困難状態に陥る。その結果、自分の精神的安定を保とうと自ら**「思考回路の遮断」**を起こし、最終的に**「思考の停止」**状態が起こる。大方の学生は、以上のような経過をたどる。

震災発生後2週間が経過すると、被災地支援に出掛けようとする学生も現れ、精神的には落ち着きを取り戻し始めている。そして、震災発生後の**「その後の対応」**に学生毎の差異が見られるようになる。2週間で被災地の知人と連絡を取りく被災地の知り合いの救済活動を実施しようとする学生、ランドセル回収の準備を進める学生、ランドセルを回収した際などに接してきたく周囲の人たちのやさしさ、く友人の支援に対する考え方に共感し**「積極的な行動」**を起こす学生が現れ始める。彼らとは対照的に、く家にいても仕方がないから支援に行ってみようかと考える学生、周りを見届けてからく次の機会に支援活動に参加するのでも良いではないか、また、被災地には行かないが、募金や物資提供などく地元でできる支援を実施しようとする**「消極的な行動」**を選択する学生も出てくる。さらには、アルバイトなどく自分の生活で精いっぱいであることや、津波後に発生した放射能汚染によるく現状への恐怖、さらには、支援活動自体の意義を自分なりに解釈しく自己満足な支援活動の回避を選択する学生など**「積極的な行動回避」**を選択する学生も出てきた。また、少数ではあるが、他者の行動を知っても日常の**「行動変化なし」**という学生もいた。

震災発生4週間後、すなわち、“ランドセル大作戦”活動が実施された後になるが、**「積極的な行動」****「消極的な行動」****「積極的な行動回避」**を取った学生の中に**「対応後の意識変化」**が現れている。まず、**「積極的な行動」**を取った学生は、行動後に**「より良い生き方の見直し」**という意識変化が起きている。より良い支援の在り方を考え直すく支援の在り方の模索や、一方的にメ

ディアから流れてくる情報に対して〈情報の見方に変化〉の気持ちが生じている。また、被災地での交流などを通し感じたことを、被災者や友人に伝える〈思いを伝える大切さ〉を強く感じている。被災地や被災者の現状を直視したことで〈恵まれている自分を再確認〉し、〈日本人の素晴らしさを再発見〉するという《生きていることの素晴らしさを実感》するようになる。一方、少数ではあるが、《自分への後悔》を感じている学生もいる。これは、〈行動したことに対する後悔〉であり、野次馬的思考で支援活動に参加したのではないかと、支援に行くこと自体が友人への自慢になるから行ったのではないかと、という意識である。これらの意見は、自分が思い描くような支援活動が実践できなかった学生に見られる意識である。支援に対する思いが強すぎる学生の意識変化と考えられるのではないだろうか。

《消極的な行動》を取った学生は、《自分への後悔》として、〈行動しなかったことに対する後悔〉を感じている。支援活動から戻ってきた友人の様々な話を聞く中で、自分自身の決断力、行動力のなさを悔やんでいる学生たちである。彼らの心の中にはランドセル回収を手伝っている者もいたが、一方で、肅々と被災地での支援活動の準備を進めている友人の姿を見ながら迷っている自分自身に情けなさを感じている者もいる。結果的には《消極的な行動》という決断を下したことに強く後悔している。彼らの多くは、2回目以降の被災地支援活動に積極的参加をしている。

《積極的な行動回避》を選択した学生の一部は、上記と同じ理由で《自分への後悔》として〈行動しなかったことに対する後悔〉を感じている。しかし、その割合は《消極的な行動》を選択した学生と比較すると低く、2回目以降の被災地支援活動に参加する割合も少ない傾向がある。《行動変化なし》の学生には、特に大きな意識変化は見られない。

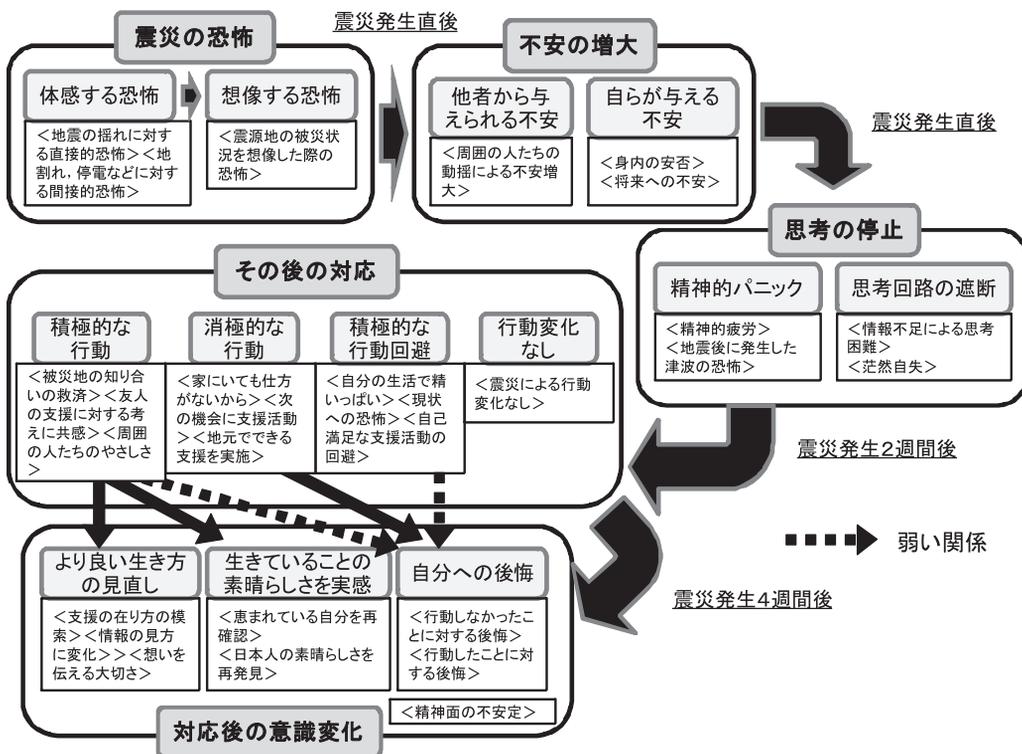


図3 カテゴリー関連図

2. 環境教育活動に参加していない一般学生への調査分析結果

被災地に行って支援を行いたいかという問いに対する回答を、ランドセル大作戦の話を講義で聞いた学生と聞かなかった学生で比較したのが図4である。報告を聞いていない学生に比べて、報告を聞いた学生のほうが被災地に行きたいと答えた比率が高かった。

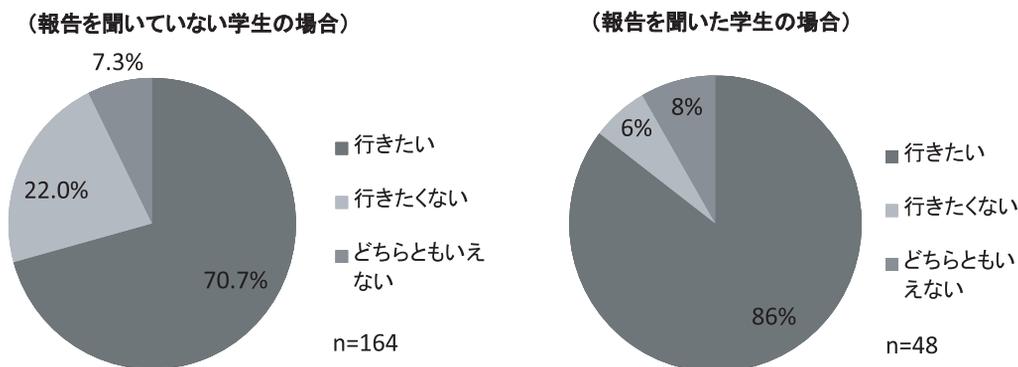


図4 被災地に行って支援をしたいかという問いへの学生の回答

報告を聞いた場合と聞かなかった場合の回答の差があるかを確かめるためにカイ2乗検定を行ったところ、有意差が認められた ($\chi^2=7.012$, $p<0.05$)。これにより、ランドセル大作戦の報告が、学生の行きたい意欲に何らかの影響を与えたものと考えられる。すなわち、同年代の学生の取組みを「知る」ことが支援活動への参加意識を高める結果となっていることが理解される。

行きたいと答えた学生も行きたくないと答えた学生も、「自分に何ができるかわからない」「行っても迷惑になるのではないか」という回答理由が共通しており、迷いながらの回答であったことがうかがえる。同年代の学生の取組みを「知る」ことは、この迷いから行きたいという意欲につながる後押しとなったのではないかと考えられる。

次に、被災地の子どもたちへの環境教育は必要かという問いに対する回答を、ランドセル大作戦報告を聞いた学生と聞かなかった学生で比較を行った(図5)。被災地に行って支援したいかという問いの場合と同様に、被災地の子どもたちに環境教育が必要であるという回答は、ランドセル大作戦報告を聞いた学生のほうが高い比率を示した。この回答の差を確かめるためにカイ2乗検定を行ったところ、同様に有意差が認められた ($\chi^2=6.6175$, $p<0.05$)。これにより、ランドセル大作戦報告が、被災地における環境教育の必要性を感じるような影響を与えたことが示唆された。

設問は環境教育という言葉だけで示され、環境教育の分野や具体的な内容は提示していない。どのような環境教育が必要だと考えるかという問いに対して多くみられた回答が、地震・災害対策を含む自然の脅威に対する知識や対応する方法であった。さらに、これらを学ぶには今はよい機会であり必要であるという回答もみられた。環境教育は必要ないという意見には、今は生活の立て直しを優先すべきで環境教育をしている余裕はないという回答が複数みられた。

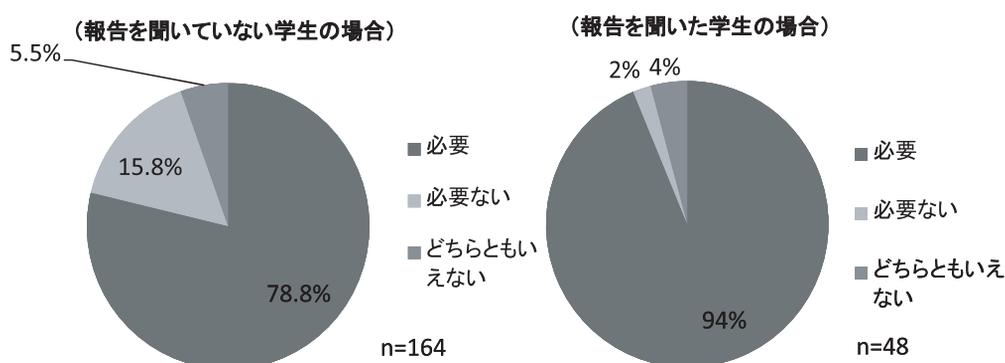


図5 被災地の子どもたちへの環境教育は必要かという問いに対する学生の回答

小学生や幼児に対してどのような支援をしたいかという問いに対する回答を図6に示した。

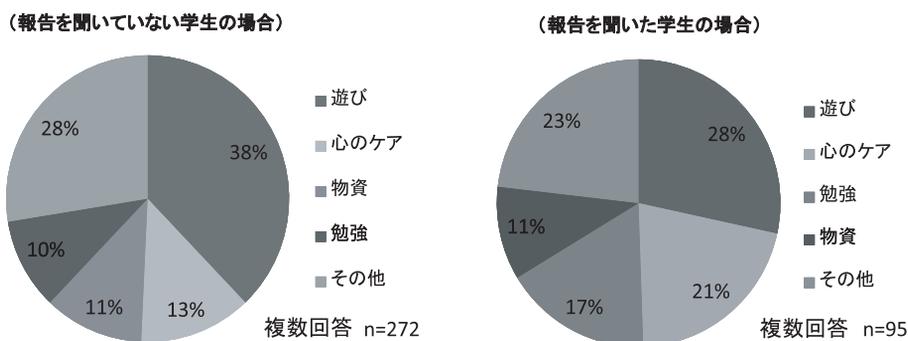


図6 被災地の子どもたちに必要な支援は何だかという問いに対する学生の回答

小学生や幼児に対して行いたい支援の上位に上がったのは、遊び、心のケア、勉強、物資であった。ランドセル大作戦報告を聞いた学生も聞いていない学生も、第一に子どもたちと遊んであげること、第二に話を聞くなどして心のケアをしてあげてを挙げている。第三、第四には勉強と物資の支援が挙げられた。ただし、勉強と物資については、報告を聞いたグループと聞かなかったグループで順番が入れ替わっている。支援したいと考えるものについて同様にカイ2乗検定を行ったところ、有意差は認められなかった ($\chi^2=8.0065$, $p>0.05$)。従って、ランドセル大作戦報告を聞いた学生も聞かなかった学生も支援内容については同じような考え方をしていると考えられる。

遊びの中には、一緒に歌を歌う、運動やゲームをやる、とにかく思いっきり遊んで楽しんでもらうなど、被災して沈みがちな気持ちを盛り上げたいという回答が多かった。心のケアとしては、話を聞く、楽しいことを話してあげたり、してほしいことを聞いて希望をかなえてあげたいといった内容が多かった。勉強をみてあげることについては、学校がまだ機能していない不安を取り除くことや、自分にもできることだからという理由で挙げられていた。物資については、衣類、食物、水などの生活物資から住宅まで、あらゆる分野が挙げられていた。

考 察

以上、2種類の調査結果より、支援活動に積極的に参加する学生や消極的な学生の意識、支援活動に参加・不参加の学生の意識変化、支援活動の報告を聞いた一般学生の意識変化に関する分析を行った。

図7は、[消極的な支援活動]、[積極的な行動回避]を選択した学生が、[積極的な支援活動]に参加するための要因をまとめたものである。大学生の被災者支援活動への参加意識は、<周囲の人たちのやさしさ>に触れることや、<友人の支援に対する考え方に共感>すること、すなわち「他者への共感」と、<行動しなかったことに対する後悔>に現れているように「自らの意識

で行動する勇気」に強く支配されていることが分かる。すなわち、[消極的な支援活動]を選択した学生には「自らの意思で行動する勇気」をもたせることで、一方、[積極的な行動回避]を選択した学生には「他者への共感が増す」ことで参加意識が高まることが予想される。

《消極的な行動》を取った学生の多くは、2回目以降の被災地支援活動に積極的参加をすることから、《自分への後悔》が、2回目以降の「自らの意思で行動する勇気」を奮い立たせたと考えられる。また、《積極的な行動回避》を選択した学生の一部は、2回目以降の被災地支援活動に参加していることから、《自分への後悔》が、「他者への共感」を深めるきっかけを作っていると考えられる。

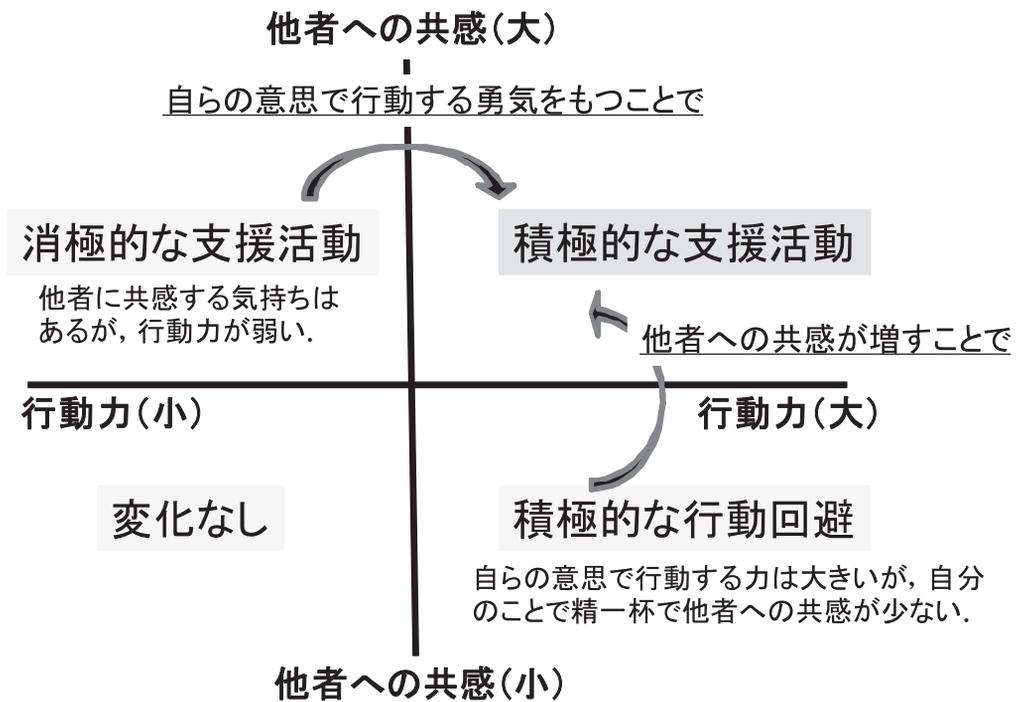


図7 参加意識2つの要因

一方、ランドセル大作戦に直接参加するきっかけを持たなかった一般学生について考えてみたい。ランドセル大作戦終了時点には、図7の参加意識の2つの要因図における行動変化なしの 카테고リーに該当する。しかし、講義の中という聞き流されそうな条件下であっても、ランドセル大作戦の報告を聞いた学生と聞かなかった学生の間には、被災地支援に対する意識に差がみられた。「自分が役に立つかわからない」「何をしたいかわからない」という同じ気持ちを持っていても、報告を聞かなかった学生より報告を聞いた学生のほうが、ボランティアに行きたいと回答した学生の数が有意に多かった。この差は、現地の写真を含めた現場報告により、

自分と同じようなごく普通の学生が被災地に飛び込んでいった事例がきっかけとなって、不安を超えて行きたいという意欲が生まれた結果が現れたものと考えられる。この変化も「他者への共感」が高まった結果の意識変化とみなされるのではないだろうか。

さらに、ボランティア活動と同時に自然の脅威を画像で説明した報告から、自然がもたらす災害をよく知ることが環境教育であるという考えを生み出し、環境教育の必要性を喚起させ、今こそがチャンスであるという意見へとつながった。被災地の子どもたちに必要な支援について聞いた問いに対しても、「勉強」という回答が上位3つの中に入っている。

子どもたちに必要な支援については、ランドセル大作戦報告を聞いた学生と聞かなかった学生の間で、明確な差は見出せなかった。これは、ランドセル大作戦報告が、これまで持っていた知識、自分自身が支援する場合のイメージについて変化をもたらすものではなかったということではないかと考えられる。ランドセル大作戦そのものは、誰にもイメージしやすい内容であり、新学年の始まる時期に特化していたため、支援に対する具体的な知識、イメージを追加して与えることがなかったからではないかと考えられる。

このような学生たちが行動に移るためには、やはり「自らの意思で行動する勇気」を持つことが必要であろう。その場合、具体的かつ学生にもイメージがつかみやすい内容の支援活動の存在と参加への直接的なきっかけが必要なのではないだろうか。すでに支援活動に参加している学生から誘われて参加するという形が最も効果的であると考えられるが、行政、地域、市民団体などによる支援活動の中にきっかけを作ることでよいだろう。直接的な行動へのきっかけが、「他者への共感」「積極的な支援活動」へとつなげていくのではないかと考えられる。

以上見てきたように、学生の参加者は、被災者や被災地に対する悲壮感や正義感といった切迫した感じはあまりなく、「他者への共感」に見られるように、支援活動に参加する他者と繋がること、被災者と繋がること、すなわち「心の繋がり」を求めているようである。そして、活動への参加を通じて、「自らの意思で行動する勇気」を持つことで自分と社会の結びつきを感じようとしている状況は、現在の若者の特質、人と人の繋がりに関する社会の在り方を反映しているのではないかと考えられる。社会が学生を育て、学生が社会を支えていく双方が共進化していく社会システム、すなわち、社会全体での「支え合い」の心を再確認することが「心の繋がり」、「他者への共感」を育む土壌を作り出していくのである。

今後の課題

今回は、学生に対し、震災発生直後の被災者支援活動への参加意識を調査した。日常、環境活動に参加している学生の中にも「積極的に参加」、「消極的に参加」などタイプが異なる。今回は、日常の活動参加への意識と被災者支援活動への意欲の関係性を調査し、積極的に被災者支援活動に参加する学生を増やすための日常のあり方について検討を進めていきたい。さらに今後は、これらの基礎資料を活用し、今後起こるであろう震災被害に対する大学生の支援活動の

輪を広げていくための方法に役立てていきたい。

引用文献

- 大学生の自己理解と社会認識の関係についての研究（1）—現代社会における当事者意識の形成—
—（2006） 滝沢利直，菅田圭次 東京工業大学工学部紀要 Vol.209 No.2 p1-9
(2011.10.5 受稿，2011.10.28 受理)